

## 新津油田金津鉷場跡について

新津油田の中でも金津鉷場は、地元・金津村の庄屋であった中野貫一（1846～1928）と忠太郎（1862～1939）の親子を中心に開発が進められました。

1874年に初めて出油に成功して以来、貫一と忠太郎は数々の苦難にもめげず、1895年に上総掘りを、1903年には綱式機械掘りを導入して産油量の拡大に成功し、経営を軌道に乗せました。これにより、貫一は日本の石油王とも呼ばれました。

さらに、中野家が創設した中野興業は、西山油田の他、秋田県など県外の油田開発にも取り組みましたが、国策により1942年に帝国石油へ統合されました。戦後、民営化された帝国石油は、新津油田の経営を続けましたが、1968年に金津鉷場の鉷業権を中野家に譲ります。そして1996年、中野家が経営していた丸泉石油興産は金津鉷場の操業を停止し、新津油田における原油採掘の歴史は幕を閉じました。

金津鉷場がまだ操業していた1980年代以降、新津市は金津鉷場とその周辺を「石油の里公園」として整備し、1988年には「石油の世界館」を開館しました。

2018年、文部科学大臣は「新津油田金津鉷場跡」を「近代日本におけるエネルギー産業の発展を物語る遺構」として高く評価し、近代の石油産業に関するものとしては初めて国の史跡に指定しました。



かつての金津鉷場



ようこそ、「石油の里」へ

# 新津油田金津鉷場跡

にいつゆんでんかなづこうびょうあと

国指定史跡

新潟市



### 石油の里(史跡)へのアクセス

#### ■お車で

JR信越線「矢代田」駅から約2km

磐越自動車道「新津」ICから約12km

日本海東北自動車道「新潟亀田」ICから約17km

北陸自動車道「巻潟東」ICから約20km

### 周辺の施設

■石油の世界館 電話：0250-22-1400

■里山ビジターセンター 電話：0250-22-6911

■中野邸記念館 電話：0250-25-1000

#### 【参考文献】

『新津市史』『新・新潟歴史双書3 石油王国・新潟』

『旧新津油田金津鉷場総合調査報告書』

【協力】 石油の世界館友の会

【画像提供】 新潟市文化財センター

#### 発行

新潟市秋葉区地域総務課

電話：0250-25-5671 FAX：0250-22-0228

電子メール：chiikisomu.a@city.niigata.lg.jp

2020年10月 初版  
2022年2月 改訂版

## 新津油田について

新潟市の南東部に位置する新津丘陵は、古くから地域の人々の暮らしに欠かせない里山として親しまれています。かつて、この丘陵の各地から原油や天然アスファルトが産出していました。これらの産出場所をまとめて、「新津油田」と呼びます。

新津丘陵にほど近い大沢谷内遺跡からは、アスファルトが付着した縄文時代の土器・石器やアスファルトのかたまりが多く出土しています。これらは新津丘陵から産出したアスファルトを用いたと考えられています。



大沢谷内遺跡の出土品

17世紀の初め、真柄仁兵衛はこの丘陵の中で、ブクブクと原油の湧いている場所を発見しました。まるで何かを煮ているようだったので、その場所は「煮坪」と呼ばれました。この発見をきっかけに、真柄仁兵衛は新発田藩の許可を得て、原油の採掘を始めます。



煮坪

19世紀後半、開国と文明開化によって、灯油ランプが普及すると、灯油の需要が増大します。そのため、政府は原油採掘を自由化し、各地で採掘が行われるようになりました。

新津油田で産出される原油はドロドロとした重質油でした。そのため、灯油に精製するには不向きで、価格も初めのうちは高くありませんでした。

1890年代以降、産業革命や日清・日露戦争によって重質油の需要が拡大し、また上総掘りや綱式機械掘りによる採掘が相次いで成功することで、新津油田の産油量は飛躍的に増加し、日本を代表する油田となりました。また、油田から産出される石油を輸送するために鉄道が敷設され、新津駅は鉄道の要衝へと成長しました。



上総掘りのやぐら



## 新津油田金津鉦場跡に残る採油のシステム

新津油田金津鉦場跡に点在する遺構は、原油の採掘から油水分離までの一連のシステムとして、それぞれがつながりあって機能していたことを物語っています。

原油を採掘するための動力は、モーターの回転運動によって生み出されます。この回転運動はポンピングパワーによって往復運動に変えられ、地形を巧みに利用しながら、引張線(ワイヤー)・招木・継転機を經由して、それぞれの油井へと伝えられます。

さらに、この往復運動は油井にあるポンピングジャックで、油井を掘り原油をくみ出す上下運動に変えられました。

そして、くみ出された原油はパイプラインで集油所へ送られ、加熱炉や水切りタンクで油分と水分を分けた上で、新津や新潟の市街地にある製油所へと運ばれていきました。

